



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	はじめに
Author(s)	津曲, 敏郎
Relation	アレクサンドル・カンチュガ著 ; 津曲敏郎編訳 = Aleksandr Kanchuga ; edited with a Japanese translation by Toshiro Tsumagari, ウデヘ語自伝テキスト = An Udehe autobiographical text with a Russian translation. 大阪学院大学情報学部, 2002.8, vi, 337p. (科学研究費補助金(特定領域研究(A))研究成果報告書, . 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究)(ツングース言語文化論集, 17) (ELPR publication series, A2-019)
Citation	ツングース言語文化論集, 17, 1-4
Issue Date	2002-08-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57412
Type	report
File Information	03IntroductionJa.pdf



はじめに

津曲 敏郎

ウデヘ (Udehe) はツングース系少数民族で、1989 年現在人口 1902 人、うち 24% (460 人弱) がウデヘ語を母語とするとされている (Girfanova 1994, 以下の村別人口も)。ロシア極東のハバロフスク州ホル川流域のグヴァシュギ (160 人)、アニュー川流域アルセーニエヴォ (50 人)、沿海州サマルガ川流域アグズ (144 人)、そしてビキン川流域のクラスヌィ・ヤール (400 人) 等の村に比較的集中して居住している [地図参照]。筆者は 1996 年以来、数次に渡りクラスヌィ・ヤール村を訪れて、アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・カンチュガ (Aleksandr Aleksandrovich Kanchuga) 氏 (1934 年生まれ、男性) からウデヘ語の調査を継続している。この年代でウデヘ語を自由にあやつれるのはもはや例外的と言わなければならないが、これは氏が永年の学校教師としての経歴 (校長も勤めた) の中で、子供たちに自作の教材でウデヘ語教育を試みるなど、人一倍民族語への関心が高かったことが大きいようである。

ウデヘ語は 1930 年代、ホル方言をもとに文字化の試みがなされたが定着せず、今日では一般に文字で表わされることはない。近年に至って、新たな教科書 (Kjalundzjuga 1999) によるウデヘ語教育の試みも部分的に行われているが、ウデヘ語そのものの衰微をまえに、文字化の拡大・普及をただちに期待できる状況にはない。したがって氏がロシア字を使ってウデヘ語を自由に書き表わすことができるのは得がたい能力と言わねばならない。筆者の求めに応じて少年時代の思い出をウデヘ語とロシア語の対訳形式でつづってくれたのが、ここに紹介する自伝テキストである。最初の調査時に書かれ始めたが、その後おりにふれて書きためたものを送ってもらったり、訪問の際にまとめて提供されたりして、つごう 31 章にまで達した所で、ひとまず少年時代篇の終了という大作となった。氏の構想では 3 部構成の第 1 部をなすとのことである。第 1, 2 章分のみ市販のノートの片面を使っているが、第 3 章以後は綴じ目からほどいて縦長に使い (20.3cm×32.7cm)、縦に二分して左にウデヘ語、右にロシア語をボールペンで記している [図参照]。おおむね 10 ページ程度で章を改めていて、31 章分で全 329 ページになる。両言語はおおむね同時並行的に書かれたようであるが、基本的にはウデヘ語が先行していると思われる、それはロシア語の短く簡潔な文体にも現れている。

ウデヘ語について、語彙・文法を備えたまとまった記述としては、長い間、Shnejder (1936) が利用しうる唯一のものであるという状況が続いてきた。ようやく近年に至って、Kormushin (1998) が語彙・文法に加えてテキストをも収めた形で公刊されるとともに、フォークロア・テキストの集成として Simonov ed. (1998) も出た。さらに Nikolaeva (1999) は未刊ではあるが、英語による大部な文法記述である。最新刊の辞典として Girfanova (2001)。いっぽう外国人にも調査が可能になったことを受けて、津曲 (1997, 1998) では

短い文例、風間（1998）では3篇のテキストが日本語逐語訳を添えて紹介されている。

こうした既刊のテキストと比べた際の本資料の特徴としては、何と言っても話者自らが書き記したものであること、そして内容的にも、民話・伝説を主とするこれまでのテキストとは違って、著者の実体験の記録であることである。そこから言語資料としてのみならず、20世紀前半のウデへの伝統的生活の証言としての貴重な価値をもつと言えよう。氏の卓越した記憶力と表現力を得て、その記述は具体的で臨場感あふれるものとなっている。むろん多少の文学的脚色は避けがたいにしても、全体として著者の子供時代の暮らしを忠実に伝えるものであることは疑いない。ここには著者の記憶の中に封印されていた少年時代の思い出—たとえば漁労・狩猟・採集等の生業活動の様子や家族と村の人々の暮らし、信仰と精神生活、学校と遊び、あるいは戦争をはじめとする「近代」とのかかわりなどが、感受性豊かな子供の目を通していきいきと語られている。

この時代のウデへの見聞を含むものとしては、『デルスウ・ウザーラ』（邦訳 アルセーニエフ 1965, 1995）をはじめとするアルセーニエフ（V. K. Arseniev）の沿海州探検記がよく知られている。上記の Simonov ed. (1998) には、アルセーニエフ採集の民話も（ロシア語のみの形ではあるが）多数おさめられている。またウデへ自身の手になる自伝的小説で本資料とも似た性格をもつものとして Kimonko (1964) がある。これは本来ウデへ語からロシア語へ翻訳されたものだが、ウデへ語そのものの形では公刊されていない。ちなみにカンチュガ氏による本テキストには著者の父が1927年アニュイ川流域を調査中のアルセーニエフに会って、ロシア名をもらった話（したがって著者の父称アレクサンドロヴィチはアルセーニエフの名付けに由来することになる）や、同様に父が上記のキモンコにも会い、小説中の記述をめぐってその真意を確かめる話なども、父から聞いた話として出てくる。

本資料は本来言語資料として意図したものであるが、そのことがきっかけとなって著者であるカンチュガ氏の母語と伝統文化への熱意が呼び覚まされ、単なる言語資料を越えたこのような貴重かつ興味深い資料が得られたことは望外の喜びである。過去の記録としての資料的価値もさることながら、少数民族の中からこうしたすぐれた人材が、いわゆるインフォーマントとしての役割を超えて、みずから主体的に語り記録することの現代的意義もまた大きいと考える。本テキストについては、おもにそのロシア語版に基づいて、すでに全文の和訳をカンチュガ／津曲（2001）として刊行した。本冊子のウデへ語逐語訳と合わせて参照されたい。そのほか、Tsumagari (2001a), 津曲 (2001b, 2002) においても資料の背景や内容の紹介を行っている。

本冊子では著者の表記によるウデへ語テキストと合わせて、編訳者による日本語逐語訳を併記した。その作業には著者自身から多大の教えを受けたほか、上記 Shnejder (1936) および Kormushin (1998) の語彙を参照した。これら著者や辞典からの確認が得られずに、ロシア語版の記述から意味を推定した部分もある。なお著者のウデへ語表記法には一貫性を欠く部分も散見するが（特に母音の長短、同一音素の恣意的な書き分け等）、そのま

まとしてある。ただし **h** は **ŋ** にあらため、母音の上の長音符（多くは補足的にあとから付されたもの）は母音字を重ねて示した（著者自身がはじめから母音字を重ねて書いている場合も多くある）。音声面での参考として、著者自身の朗読になるウデヘ語原文の録音 CD を付す。ただし録音時に表記と違って読んだり、あるいは録音後に著者がテキストに手を加えたりしたため、多少食い違う部分がある。本冊子後半には著者によるロシア語対訳を掲載した。原文テキストの分析・解釈の手がかりとしてのみならず、ウデヘ自身を含むロシア語話者にも利用されることを願うものである。対照の便宜のために、原文テキスト・ロシア語対訳とも、章ごとに原ノートのページ番号を付した。なお日本語逐語訳において、人名・地名などはロシア語訳のもの（ロシア名）にしたがった部分がある。ところどころ内容や語形・語義にかかわる注を付したが、全体としてきわめて不十分なものに過ぎない。分析と検討は今後の課題とし、とりあえずは原著の形を再現することに主眼を置いた次第である。

著者から資料の提供を受けて以来、数年の歳月が流れてしまった。編訳者の遅々たる仕事ぶりにもかかわらず、いつも協力を惜しまなかった著者に対して、心からのお詫びとお礼を申し上げたい。また原稿の整理には小林香与さんから多大の助力を得た。記して感謝の意を表したい。

* 上記の文章には、津曲 2002:第 1 節の記述と重複する部分があることをお断りしておく。

参考文献

- アルセーニエフ, V. K. / 長谷川四郎 (訳) 1965. 『デルスウ・ウザーラ: 沿海州探検行』東京, 平凡社 (東洋文庫).
- アルセーニエフ, V. K. / 長谷川四郎 (訳) 1995. 『デルスウ・ウザーラ』上・下, 東京, 河出書房新社 (河出文庫).
- Girfanova, A. X. 1994. Udegejskij jazyk. In V. P. Neroznak (ed.) *Krasnaja kniga jazykov narodov rossii*, 57-58, Moskva, Academia.
- 2001. *Slovar' udegejskogo jazyka*. Sankt-Peterburg, Nauka.
- カンチュガ, A. / 津曲敏郎 (訳) 2001. 『ビキン川のほとりで: 沿海州ウデヘ人の少年時代』札幌, 北海道大学図書刊行会.
- 風間伸次郎 1998. 「ウデヘ語とその語りにみる狩猟・自然観」. 佐藤 (編) 1998:318-285.
- Kimonko, Dzhansi 1964. *Tam, gde bezhit sukpaj* (povest' perevod s udegejskogo Ju. Shestanovoj). Moskva, Sovetskij Pisatel'.
- Kjalundzjuga, V. T. 1999. *Udie kejeveni on 'oiti*. Xabarovsk, Xabarovskoe knizhnoe izdatel'stvo.
- Kormushin, I. V. 1998. *Udyxejskij jazyk*. Moskva, Nauka.
- 森本和男 1998. 「クラスヌィ・ヤールとビキン川流域の調査」 佐藤 (編) 1998:1-41.

- Nikolaeva, Irina 1999. *The grammar of Udihe*. Leiden University [unpublished Ph.D. dissertation].
- 佐藤宏之（編）1998.『ロシア狩猟文化誌』東京，慶友社.
- Shnejder, E. R. 1936. *Kratkij udejsko-russkij slovar'*. Moskva/Leningrad, Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.
- Simonov, M. D. (ed.) 1998. *Fol'klor udegejtsev: nimanku, telungu, exe*. Novosibirsk, Nauka sibirskoe predpriyatie RAN.
- Tsumagari, Toshiro 2001a. Preliminary remarks on an Udehe autobiographical text: with a sample of shamanistic episodes. In O. Miyaoka and F. Endo (eds.) *Languages of the North Pacific Rim* vol.6:1-7, Suita, Osaka Gakuin University.
- 津曲敏郎 1997.「ウデへ語文例」『言語センター広報 *Language Studies*』5:83-91, 小樽, 小樽商科大学言語センター.
- _____ 1998.「ウデへ語文例補遺」『言語センター広報 *Language Studies*』6:107-110, 小樽, 小樽商科大学言語センター.
- _____ 2001b.「ウデへの自分史との出会い」『*Arctic Circle*: 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌』41:12-14, 網走, 北方文化振興協会.
- _____ 2002.「ウデへの精神文化断章：自伝テキストから」煎本孝（編著）『東北アジア諸民族の文化動態』39-65, 札幌, 北海道大学図書刊行会.